

## ◎事業に関する事項

### ■国営播州葡萄園

播州葡萄園は、

一八八〇（明治十三）年三月に当時の加古郡印南新村で開園しました。ぶどうの栽培とワインづくりをめざした明治政府の大プロジェクト

の一つでした。  
一八八三（明治十六）年頃から本格的にブドウの収穫がはじまり、ワインやブランデーなどを生産したという記録が残っています。その後、一八八八（明治二十二）年に民間へ払い下げられ、一八九六（明治二十九）年ごろには、廃園の状態になつたと考えられています。

この播州葡萄園については、『農務顛末』という国がまとめた資料や、当時のものと考えられる古い井戸、移築した屋根などがわずかに残っているだけでした。ところが、



醸造場地下室

一九九六（平成八）年七月に、印南地区のほ場整備事業で、偶然にレンガ積みの一部が発見されました。発掘調査を行つたところ、一八八六（明治十九）年に完成したワイン工場の地下室跡がみつかり、レンガを敷きつめた造りであつたことがわかりました。また、ワインのボトルが入つた木箱も発見され、長い間“まぼろし”とされていた葡萄園の姿が明らかにされました。

一九九七（平成九）年一月、稻美町教育委員会は、明治前期の国策やこの地域の歴史を理解するための重要な歴史遺産として、このワイン工場の遺構を町指定文化財に指定しました。



木箱に入って出土したガラス瓶  
(参考資料:『播州葡萄園百二十年』)

## ■ 東播用水事業

とうばんようすいじぎょう

加古川の支流はどの川も水量が少なく、この地域の慢性的な水不足の原因となっていました。そこで、加古川の支流にダムを造り、ダムとダムをトンネルで結び、加古川流域全体の水を有効に使うという構想が立ち上りました。

加古川支流の篠山川のほか、東条川や志染川（山田川）のそれに川代ダム・大川瀬ダム・呑吐ダムを建設し、その3つのダムを約三十六キロメートルの大きな水路でつなぎ、大規模な水利ネットワークを構築する計画がつくられました。

事業は、一九七〇（昭和四十五）年から一九九三（平成五）年までの約二十五年間を費やして、国営事業として実施されました。

計画の実現により、淡河川山田川疏水は一年を通して用水が安定するようになり、加えて神戸市や三木市といった別の地域の農業用水にも用いられています。また、事業に関連して山林三百三十ヘクタールが農地となりました。既存の多くの施設がこの

事業で一体的に整備され、農作業の機械化や省力化が進み、地域の農業生産性の向上が図られています。

さらにこの事業では七市一町（神戸市・明石市・加古川市・三木市・稻美町・播磨町他）の上水道への利用も行われています。



（参考資料：パンフレット「わたしたちの東播用水」）